京都府立大学学術報告（理学・生活科学）第46号　B系列 p. 7～13（1995年11月）

主婦の個室に対する意識 ── 京都の都市住宅の場合 ──

家族の自立を可能にするための住居計画的研究(1)

町　田　玲　子・坂　田　　希

Housewives' Thoughts on Their Private Space: A case of urban housing in Kyoto. ── A House-Planning Study for Establishing the Individual in the Family (1) ──

REIKO MACHIDA and NOZOMI SAKATA

要約：本報告は，主婦の個室の実態および希望意識について，京都市内およびその周辺地域に居住する世帯を対象に調査し，まとめたものである。その結果は次の通りである。

① 現状では調査対象者の5割強の主婦が個人的空間を持っており，その1/3強が個室所有層である。

② 個室非所有層のうち個室希望主婦は全体の6割弱を占め，個室を希望しながら持っていない第一の理由は住居の狭さのためである。

③ 個室希望理由のうち「家族から解放され1人になりたくなることがあるから」は「個室希望」主婦の約3/1を占め，「読書」「趣味」に次いで多い。とくに強く思う理由（◎印）のなかでは「家族から解放され1人になりたくなることがあるから」は最多である。

④ 個室希望が高い主婦層は，どちらかと言えば，自ら社会参加し自分の世界を持ちたいと思っており，一方では夫の家事分担を期待する意識タイプである。

（平成7年8月11日受理）

緒　言

本研究の目的は，家族それぞれの自立的生活を可能にするような住居のありかたを生活管理の視点を重視しながら考察し，住居計画に反映させるための基本的な資料とすることである。

本研究における自立的生活とは，家庭や地域における日常的生活面において，旧来の性別役割分業に規制されることなく生活能力を発揮し得る生活を指している。今日では，一般的に主婦以外の成人が自立的生活を営み続けることは，容易なことではない。自立的生活を困難にしている背景には，一つには「家事労働は主婦（母親・妻）の役割」とする根強い意識があること，また一つには，男性の場合，職業的時間（通勤時間含む）による拘束力が大きいことがあげられる。これら前者と後者は密接に関わり合っている。つまり前者の意識があるから後者の生活的自立の困難性は問題になりにくい。また後者の職業的拘束性ゆえに前者が必要とされる面もある。これらのことは住居計画，たとえば台所の平面計画にも影響している。作業台についてみるならば，妻にとっては家事がしやすいが，夫が台所に立つことは初めから考慮されていない，などの例に見られるように性別役割分担を前提とする計画になりがちである。

本報告では，住空間のなかでも主婦の個室に注目する。主婦が個室を確保することによって，主婦自身の自立的生活の可能性が広がり，一方家族の主婦への依存性も必要最小限になることが期待できると思われる。つまり主婦の個室が確保されることが，家族の自立につながるという考え方である。そこで本報告では個室確保の実態と個室に対する主婦の意識を調べ，家族生

京都府立大学生活科学部住空間管理研究室
Laboratory of Housing Management, Faculty of Living Science, Kyoto Prefectural University

活に及ぼす影響について考察することを目的とする。

近年，個人的生活と家族的生活との関わりが注目されるようになり，個人的生活空間に関する研究がみられるが[1,2]，生活管理上の自立の視点から扱った例はほとんどないと思われる[3]。

研究方法

まず文献調査によって主婦専用の住空間についての歴史的変遷を概観し[4]，その上で本調査に入った。

本報告の調査方法は以下の通りである。

① 調査対象の選定

京都市内の一戸建と共同住宅地の居住者，および台所改装実施世帯を調査対象世帯とした。台所改装実施者については，住生活改善に対して前向きの意識を持つ主婦が多いと考え，京都市内のインテリア関係の業者の協力を得て，顧客リストから選定した。

② 配布・回収方法

住宅地については，各世帯を直接訪ねてアンケート用紙を配布し，数日後に回収した。台所改装実施者については，郵送によるアンケート調査を行なった。

概要は表－1の通りである。調査年月は1990年11月。

表－1　調査概要

	訪問留め置き	郵　　送	全　体
配布数	257	133	390
有効回収数	227	53	280
回収率	88.3%	39.8%	71.8%
備　考	京都市左京区および北区	京都市内・周辺（台所リフォーム）	

結果および考察

1. 調査対象世帯の概要

① 住宅形式

マンションが22%，テラスハウスが37%，戸建て住宅が41%を占め，建築年数はいずれも平均10年以上である。

② 年齢・職業

調査対象者（妻）の年齢は40代前半が最も多く，平均年齢は45.1才である。同居中の最年長の子どもの平均年齢が16.3才，最年少は11.6才である。妻の44%は有職者であり，夫の61%はサラリーマンである。

③ 家族形態・人数

核家族が約8割（「夫婦2人のみ」は1割強，「親と子」は7割弱）を占め，「老親と同居」は1割強である。家族人数の平均は3.8人，同居の子供数の平均は1.7人である。

表－2　主婦の「個人的空間」の所有状況

（　）内は%

「個人的空間」の状態	%	実数　%
個室あり	(20.3)	57
個室に代わる空間あり	(34.3)	96(100)
家事室		7(7)
居間・食堂・台所などの部屋の一角		59(61)
その他（夫婦寝室・空き部屋・洋裁部屋など）		26(27)
不　明		4(4)
全くなし	(44.6)	125
不　明	(0.7)	2
計	(100.0)	280

2. 個室所有の実態

① 主婦の個人的空間の実態

全体の約20%，つまり5人に1人の主婦が自分の個室を所有している。個室に代わる空間まで加えると全体の半数余が何らかの個人的空間を所有していることになる（表－2）。個室に代わる空間として，「居間・台所・食堂等その他の部屋の一角」が6割以上を占め，その他として「夫婦の寝室」「夫婦共同の部屋」「空いている部屋」「洋裁部屋」などが複数みられた。「家事室」は1割弱程度であった。また，個室を持っているにもかかわらず「必要性を感じない」が8例（全体の約3%）みられた。

② 夫の個人的空間の実態，および妻との比較

自分の個室を持つ夫は約33%，つまり3人に1人の割合である。妻と夫の個人的空間を比較してみると，個室に代わる空間まで含めると同程度の所有状況（夫57%，妻55%）であるが，個室の所有率は夫の方が高い。

③ 住居型式別実態

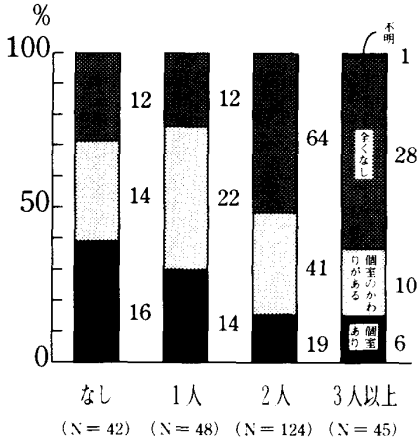
テラスハウスと戸建て住宅の個室所有率にはほとんど差がない（23%，21%）のに対し，マンションではとくに低い。後述するように，住宅の広さ，家族のライフステージなどが影響しているものと思われる。（表－3）

表－3　住宅型式別概要および個室所有状況

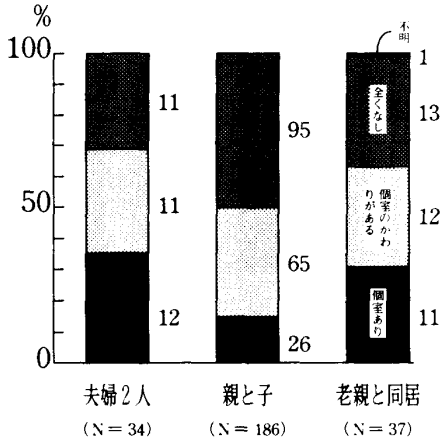
住宅型式	平均面積(坪)	主婦平均年齢(歳)	主婦就業率(%)	個室所有状況　実数（　）内は% ある	代わり	なし	不明	計
マンション	20.0	37.6	46.4	8 (13)	12 (20)	41 (67)	0	61 (100)
テラス	29.6	46.2	37.6	23 (22)	35 (34)	45 (44)	0	103 (100)
戸建て	47.1	47.7	36.1	26 (23)	49 (43)	39 (34)	0	114 (100)
その他	2						2	2
			合　計	57	96	125	2	280

④　家族の状態別

子供数が多いほど個室所有率は低い（図－１）。また「夫婦２人」世帯，あるいは「老親と同居」世帯に比べると，「親と子」の世帯の個室所有率は低い（図－２）。なお主婦の就業状態の有無別では，とくに差はみられない。



図－１　子供人数別主婦の個室所有状況（数値は実数）



図－２　家族構成別主婦の個室所有状況（数値は実数）

3．個室希望の実態

①　主婦の個室希望

調査対象者（280人）のうち，自分の個室が「欲しい・必要」が172人（61%）で，およそ５人に３人が個室を希望している。また「個室は欲しいが，持っていない」は127人（同45%）である（表－４）。

②　個室希望者の（必要とする）理由

個室が「欲しい・必要」と答えた主婦（172人）のその理由は表－５の通りである（○印については複数解答可）。「家族から解放され１人になりたくなることがある」（以下「家族から解放……」と略する）（54/172人，31%）が，「読書」「趣味」に次いで３番目に多く，「とくにそう思う」（◎印）の理由の中では最も多い。また「家族から解放……」の理由については，個室を現在持っていない層においてより高率である（○印33%，◎印9%）。「その他」の理由には，「いちいち片付けずに別の事ができる」「やりかけの仕事を中断してもそのままにしておける」「自分のものを一カ所にまとめたい」などがみられ，自分の好きなように使える空間が主婦にはない現状がうかがわれる。

表－４　個室の所有実態，および個室希望

実数（　）内は%

個室所有の有無		個室希望の有無		
		欲しい・必要	いらない	不明
個室・有	57(20.4)	45(26.1)	8(8.2)	4
代わる空間	96(34.3)	127(73.8)	89(91.8)	5
全く・無	125(44.6)			
不明	2(0.7)			2
	280(100.0)	172(100.0)	97(100.0)	11

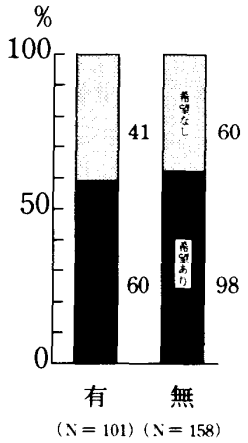
③　個室が欲しいのに「ない」のはなぜか。

「個室は欲しいが，現在持っていない」（127/280人，45%）理由として，「狭い」（56/127人，約44%）がとくに多く，次いで多いのは「代わりの空間で一応満足」（41/127，32%）である。

個室を希望する理由に関して「欲しいが狭いため持っていない」層と「狭い」以外の他の理由で持っていない層との相関を調べたところ，「家族から解放……」の理由については，狭さがとくに関係していることがわかった（カイ２乗検定により5%水準で有意差が認められた）。つまり，住宅が狭ければ「家族から解放……」の意識が強まり個室希望へと向かうが，一方ではその狭さゆえに個室の実現性が低く，そのことがかえって個室希望意識を高めるものと思われる（表－５）。

④　主婦の就業状態別個室希望

主婦の「職業あり」の101例（調査対象の36%）と，“無職”又は“専業主婦”に該当する「職業なし」の158例（同56%）について，職業の有無による個室希望を比較すると，とくに差はみられなかった（図－３）。

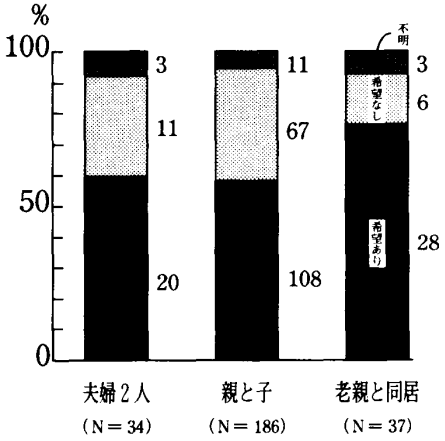


図－３　主婦の職業の有無別個室希望状況（数値は実数）

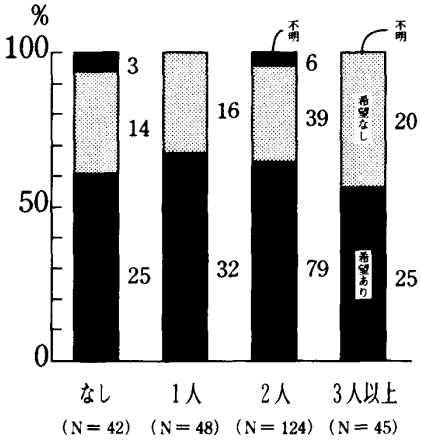
表－5　自分の個室が欲しい（必要な）理由

	「欲しい」全員		個室は欲しいが，現在持っていない 計		理由別 「狭い」	理由別 その他	「必要・現在ある」	
	%(N＝172)		%(N＝127)		%(N＝56)	%(N＝71)	%(N＝45)	
	○	◎	○	◎			○	◎
一人で読書をしたい	45.3	7.0	46	8	60	48	44	4
一人で音楽鑑賞をしたい	22.1	1.7	21	2	25	21	24	2
一人で仕事をしたい	28.5	4.7	28	5	36	30	31	4
一人で就寝をしたい	16.3	2.9	11	2	20	8	31	4
一人で昼寝をしたい	13.4	0.6	10	1	13	10	22	0
一人で裁縫をしたい	31.4	4.7	32	5	34	39	29	4
一人で趣味をしたい	39.5	5.8	40	6	50	44	38	4
家族から解放されたい	31.4	7.6	33	9	54	32	27	4
長年のゆめであった	6.4	1.7	6	2	0	13	7	0
こどもや夫にあるから	4.7	0.6	6	1	7	7	0	0
友人と気兼ねなく過ごせる	17.4	4.7	20	5	34	18	9	4
そ　の　他	5.8	0	5	0	5	4	9	0

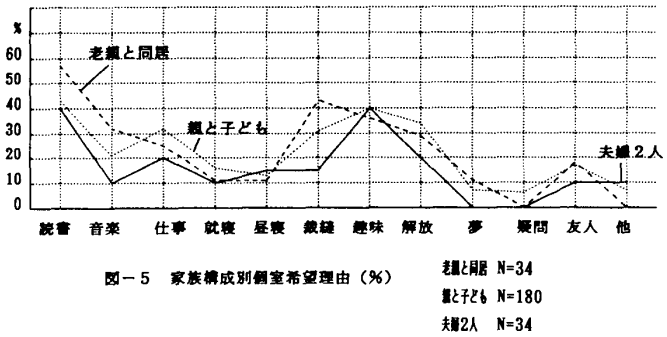
備考：○そう思う（複数回答可）　◎とくにそう思う（一つ選択）



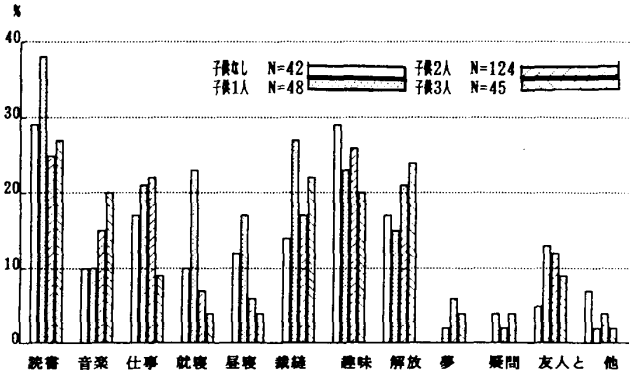
図－4　家族構成別個室希望状況（数値は実数）



図－6　子供人数別個室希望状況（数値は実数）



図－5　家族構成別個室希望理由



図－7　子供人数別個室希望（必要）理由

図5・図7の個室希望理由の具体的内容

読書 ── 静かに一人で読書をする場所が必要
音楽 ──　〃　音楽鑑賞　〃
仕事 ──　〃　仕事　〃
就寝 ──　〃　就寝　〃
昼寝 ──　〃　昼寝　〃
裁縫 ──　〃　裁縫　〃
趣味 ── 静かに一人で趣味をする場所が必要
解放 ── 家族から解放され1人になりたくなることがあるから
夢 ── 個室を持つことは，長年の夢であるから
疑問 ── 子供または夫に個室があって自分には無いのに疑問を感じるから
友人 ── 自分の友人等が来た時，気がねなく過ごせる場所が必要
他 ── その他

⑤　家族の状態別個室希望

「老親と同居」世帯では，8割強が個室を希望し，一方「夫婦2人」「親と子」の核家族世帯は共に6割弱が個室希望である。(図－4)。個室希望の理由を家族の状態別にみると，「老親と同居」では“裁縫”や“読書”のような，静かに集中できる空間として個室に期待していることがうかがわれる（図－5)。

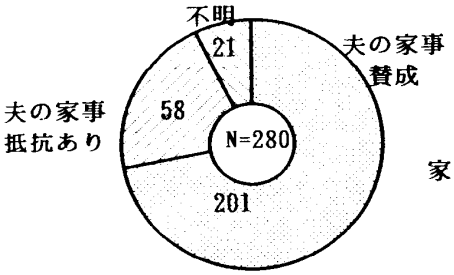
子供がある場合，子供人数が多ければ個室希望の割合は低くなる（図－6)。しかし「家族から解放……」の理由で個室を希望する主婦の割合は子供の数が多い方が高い（図－7)。一般的に主婦の個室より子供の個室が優先的に確保されるため広さに限りがあれば，子供が多いほど主婦の個室確保の実現性が低い。「家族から解放……」を個室希望の理由とする主婦の場合，個室に代わる個人的空間のありかたが当面の問題となる。

⑥　主婦の意識タイプ分類

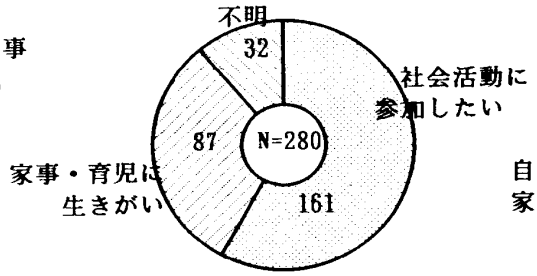
「夫の家事参加」(タイプⅠ)，「社会参加重視か否か」(タイプⅡ)，「自分か家族か」(タイプⅢ）についての調査対象者の意識を調べ，大まかなタイプ分けを行なった。各タイプについては次の通りである。

まず，タイプⅠでは図－8のように，「夫の家事賛成派」が「夫の家事抵抗派」を大幅に上回った（21%，72%)。タイプⅡでは図－9のように，「社会参加派」(58%）が，「家事育児派」(31%）より高く，タイプⅢでは図－10のように，「自分の世界を持ちたい」(54%）が「自分の生活より家族の生活が大切」(36%）より高い結果となった。つぎに，各タイプと個室希望意識との関わりをみた。図－11～13に示すように，各タイプでより多数派である「夫の家事賛成派」，「社会参加派」，「自分の世界派」において個室希望が高い。なお各タイプ別の個室所有の割合は，タイプⅡで「家事育児派」(22/87，25%）の方が「社会参加派」(27/161，17%）より若干高かったものの，タイプⅠ，タイプⅢについてはいずれも2割程度で大差はなかった。

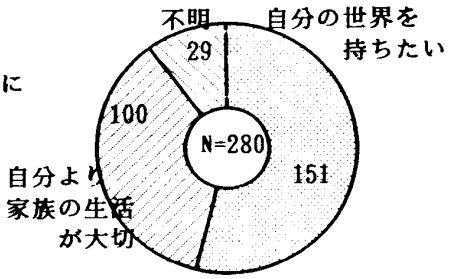
「夫の家事賛成派」「自分の世界派」などの意識タイプは今後も増える可能性が高く，個室希望は高まるものと思われる。



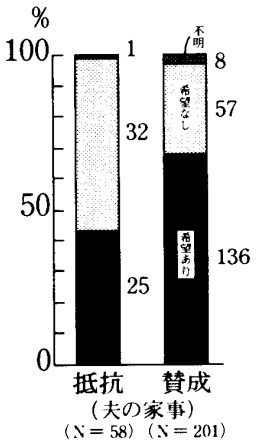
図－8　主婦の意識タイプⅠ
夫の家事・賛成派か抵抗派か
(数値は実数)



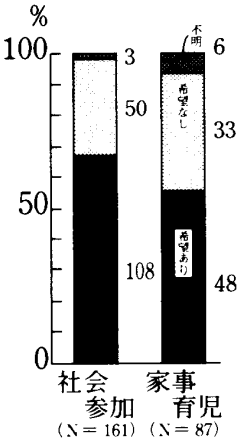
図－9　主婦の意識タイプⅡ
家事育児派か社会参加派か
(数値は実数)



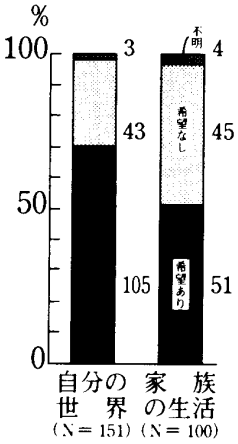
図－10　主婦の意識タイプⅢ
個人派か家族派か
(数値は実数)



図－11　意識タイプⅠの個室希望
(数値は実数)



図－12　意識タイプⅡの個室希望
(数値は実数)



図－13　意識タイプⅢの個室希望
(数値は実数)

4. 主婦の個室に対する批判的意見

全体の35%(97/280人)，およそ3人に1人は自分の個室は「欲しくない」と答えている（前出表－4）。その理由として図－14に○（理由と思うものすべて）と◎（強く思う理由）別に示した。全体的（○＋◎）にみると，「居間が代わりになる」が最も多く（44/97，45.3%），次いで「家族の団らんが減る」が多い（40/97，41.2%）。主婦が個室というプライベート空間を持つことは家族の目に届く範囲内，または家族共通の場に常時いないことを意味し，団らんが妨げられるという不安を持つものと思われる。“強く思う理由”（◎印）では，とくに「家族の団らんが減る」をあげる主婦が多い（図－14）。「個室を持っているが，必要性を感じない」（8人）場合の理由では，大半が「個室があってもほとんど使わない」（6人）であった。

5. ま と め

本研究は，家族が生活管理に関心を持ち責任を果たすことによって，家族員それぞれの自立的生活が可能になると考え，家族が生活管理に関与しやすい住居計画のありかたを考察することを目的とする。

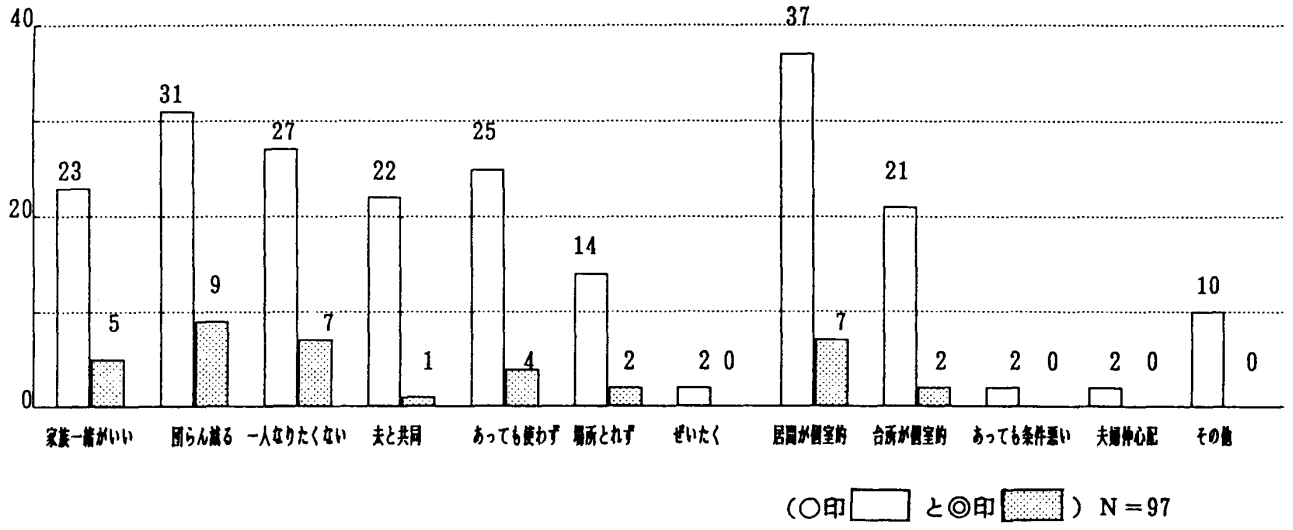
本報告では，主婦の個室の実態および希望意識について，京都市を中心とする都市住宅に居住する世帯を対象に調査し，家族の自立的生活との関わりについて考察した。その結果をまとめると次の通りである。

現状では，調査対象者の半数余の主婦が個人的空間を所有し，全体の1/5が個室を所有している。「個室を持っていない，欲しい」（個室希望）主婦は，全体の45%を占める。「個室希望」主婦の個室を持つことが出来ないおもな理由は，住居の狭さにある。また持ちたい理由のうち，「家族から解放……」が，個室所有層より非所有層において高い。狭くて持つに持てない現実が，「家族から解放……」の意識をいっそう強くさせているものと思われる。非所有層の個室希望理由のうち「家族から解放……」は「個室希望」主婦の約1/3を占め，◎印（とくに強く思う）では他の理由のなかで最も多い。「家族から解放……」の意識の背景には，主婦がつねに家族を意識せざるを得ないと同時に，家族からも四六時中依存されている実情がある。つまり家族が自立できていないことでもある。個室を持てば，一日のわずかなひとときでも自分を取り戻し，ひいては家族の生活的自立の育成にもつながるものと思われる。

主婦の意識タイプ別に「個室希望」をみると，同様のことがいえる。今日の多数派である「夫の家事賛成派」「社会参加派」「自分の世界派」の方が，「夫の家事抵抗派」「家事・育児派」「自分より家族派」より個室希望が高い。つまり，主婦自身も社会参加し自分の世界を持って社会的精神的に自立をはかる一方，性別分業に基づかない家事分担をして家族の生活的自立を期待する層において，個室希望が高いことが推察できる。

今回の調査からは以上のように，個室希望を持つ主婦層において家族に対して自立を望み，自分自身についても自立意識がより強い傾向が見られた。しかし個室所有上の問題点として，家族の団らんが減ることへの不安を持つ例も少なからずみられた。

今後本研究は，家族生活の変化を考慮しながら住宅における主婦の個人的空間，および生活管理に関わる家族共通の住空間のありかたについて明らかにしていきたい。



図－14　個室を希望しない（必要性を感じない）理由

文　献

1)　北浦かほる他「共働き家族における個人の空間・家族の空間 ── （その２）ひとりになれる空間」
日本建築学会大会学術講演会梗概集（関東）1993
2)　金平真理子他「住戸内における夫・妻の『個の場』に関する研究」
日本建築学会大会学術講演会梗概集（東海）1994
3)　高橋公子他「生活管理を軸とする住居研究」（その４）主婦の属性別生活行為と意識の実態
日本建築学会大会学術講演会梗概集（関東）1988
4)　町田玲子「主婦の個室」
『住生活と住教育』彰国社　1993，5